

闇櫻

たま櫛

別れ霜

五月雨

經つくるゑ

うもれ木

曉月夜

雪の日

琴の音

花ごもり

企画展  
樋口一葉の

初期小説

令和6年

3月16日(土)～5月12日(日)

開館時間 9時～16時30分(入館は16時まで)

休館日 毎週月曜日(祝休日の場合は翌平日)

※展示替えのため3月11日(月)～15日(金)、

5月13日(月)～17日(金)は休館いたします

※来館の前にホームページ等で最新情報を

ご確認ください

入館料 一般 300円(200円)

小中高生 100円(50円)

※( )内は20名以上の団体料金

※障害者手帳、療育手帳、精神障害者福祉手帳、

特定疾患医療受給者証をお持ちの方と

その介護者の方は無料

主催 公益財団法人 台東区芸術文化財団

台東区立一葉記念館

〒110-0012 東京都台東区竜泉3-18-4

TEL(03)3973-0004

東京メトロ日比谷線三ノ輪駅徒歩約10分

企画展

# 樋口

# 一葉の

# 初期小説

閨桜  
 たま櫛  
 別れ霜  
 五月雨  
 経つくゑ  
 うもれ木  
 曉月夜  
 雪の日  
 琴の音  
 花ごもり

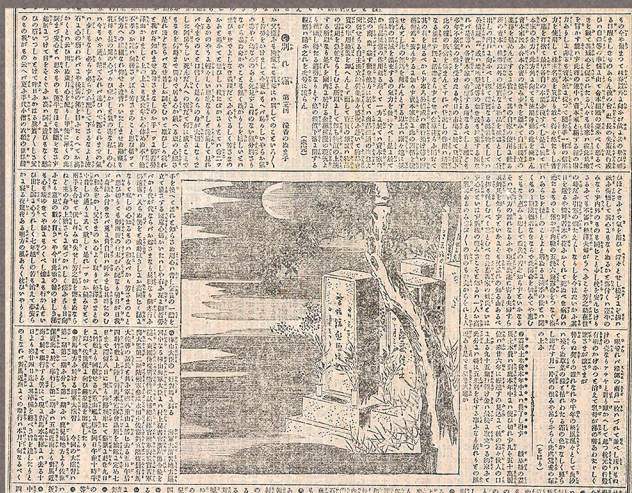
樋口一葉は、わずか5年ほどの執筆期間に22編の小説を世に出しました。なかでも「たけくらべ」、「にぎりえ」、「十三夜」などは映画や芝居にもなり、また文庫等で今でも読み継がれていますが、最初からこのような〈名作〉が書けたわけではありませぬ。19歳で小説を書いて家族を養おうと決意して以来、師から学び、繰り返し書いては直して文章を紡ぎ出し、そして自ら人脈をつくり、広げて作品を発表しました。望み通りの原稿料や高い評価を得られずとも、苦闘しながら小説と向き合ったこの時期の作品は、作家としての成長の軌跡でもあります。

本展では、デビュー作「閨桜」から、下谷龍泉寺町在住時に書かれた「花ごもり」までの10編に焦点をあてます。それぞれの作品の内容だけでなく、執筆の背景や発表の経緯なども含め、あまり知られていない一葉の小説をあらためて紹介いたします。



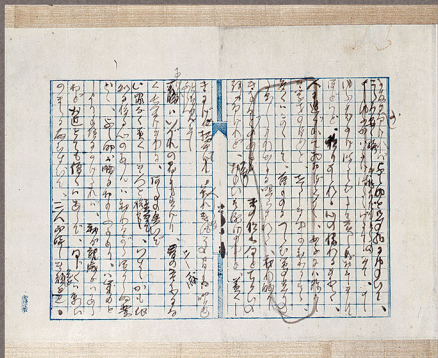
『武蔵野』全3篇 (明治25年3~7月)

小説の師半井桃水が創刊した雑誌。第1篇に小説デビュー作「閨桜」、第2編に「たま櫛」、第3編に「五月雨」が掲載された。第2編と3編の題字は一葉が書いている



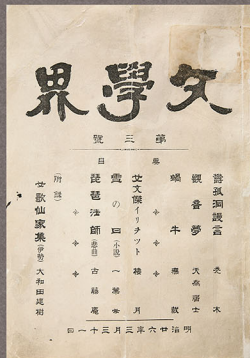
明治25年4月17日付「改進新聞」(「別れ霜」最終回掲載部分)

「別れ霜」は、明治25年(1892)3月31日から同年4月17日の「改進新聞」に全15回にわたって連載された。筆名は「浅香のぬま子」、すべての回に楊州周延の挿絵が掲載された(本展では全15回すべての掲載紙を展示します)



一葉筆「花ごもり」未定稿 (明治27年)

「花ごもり」は一葉が下谷龍泉寺町で暮らした時期に執筆された作品。其一から其四が明治27年(1894)2月発行の『文学界』第14号に、其五から其七が同年4月発行の第16号に掲載された



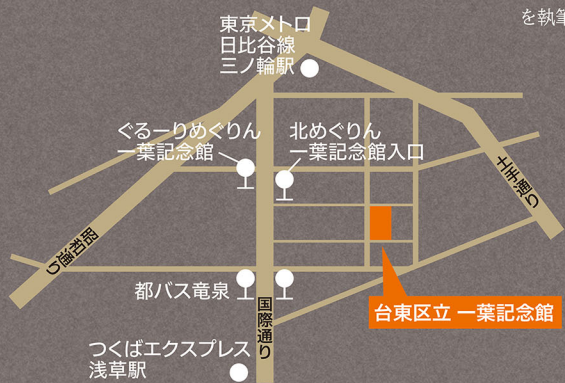
「雪の日」が掲載された『文学界』第3号 (明治26年3月)

『都の花』に掲載された「うもれ木」を高く評価した天地と禿木が、花園を通じて一葉に寄稿を依頼し、それに応えて「雪の日」を執筆した



「うもれ木」が掲載された『都の花』第95号 (明治25年11月)

半井桃水のもとを離れた一葉は、歌塾「萩の舎」の先輩田邊花園を頼り、その紹介で当時一流の文芸雑誌『都の花』に作品を発表する機会を得た。「うもれ木」は第95~97号に掲載され、これが『文学界』の星野天知や平田禿木の目にとまり、一葉を知ることになる



## 台東区立 一葉記念館

〒110-0012 東京都台東区竜泉3-18-4 Tel 03-3873-0004  
\*ご来館の前にホームページをご確認ください

- アクセス
- 地下鉄: 日比谷線「三ノ輪」駅 徒歩10分
  - 都バス(都08系統): 日暮里駅(東口) ⇄ 錦糸町駅(北口) (※いずれも「竜泉」下車) 徒歩3分
  - 北めぐりん: 「一葉記念館入口」下車 徒歩2分
  - ぐるーりめぐりん: 「一葉記念館」下車 徒歩5分
- \*駐車場はありません。

